

◆巻 頭 言◆

アジアを見据えたワンヘルスの実践

福岡県保健環境研究所長 白石 博昭



7月28日に発生した「令和8年熊本地震」で犠牲になられた方々に謹んで哀悼の意を表しますとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

昨年度から2年間、全国環境研協議会九州支部長を務めております福岡県保健環境研究所の白石です。古くから「アジアの玄関口」である福岡は、地理的特性から広域大気汚染や越境性感染症にいち早く直面してきた歴史があります。この必然性こそが、当所が高度な調査研究と監視体制を培ってきた原動力であり、先輩方の地道な努力が現在の安全な暮らしを縁の下から支えています。

近年、私たちが直面している環境や公衆衛生の課題は、ますます複雑化・多様化しており、これまでの個別のアプローチだけでは解決が困難なケースが増えています。その最たるものが、地球温暖化に伴う気候変動や生物多様性の危機、そしてそれに伴って発生する新興感染症の脅威です。自然環境の改変や地球規模での環境変化が、巡り巡って人々の健康を直接脅かすという現実には、私たちは今、まさに直面しています。こうした背景から、「人の健康」「動物の健康」「環境の健全性」を、互いに影響し支え合っている「ひとつの健康」と捉え、全体として調和を図りながら守っていく「ワンヘルス（One Health）」の考え方が世界的に提唱されるようになりました。本県では、全国に先駆けてこのワンヘルスの実践を強く推進してまいりました。

こうした中、令和9年度、当所は本県南部のみやま市に整備される「ワンヘルスセンター（仮称）」へと新築移転し、大きな転換期を迎えようとしています。この移転は単なる施設の更新ではなく、ワンヘルスを具現化するための拠点としての、大きな飛躍であります。新センターへの移転により、「保健」と「環境」という二つの重要な領域がこれまで以上に深く融合し、両分野が一体となって機能する、強固な組織の結びつきがさらに強化されます。この新たな拠点で、私たちはワンヘルスの実践を具体的な科学的エビデンスに基づき、実際の行政施策や社会実装に繋げていく段階へと移ります。

現在も私たちは、分野の垣根を越えて精力的に連携して研究を進めています。例えば、薬剤耐性菌の環境中における動態調査や、人獣共通感染症における野生動物の

監視体制の構築などは、人と動物、環境の知見が融合して初めて前進する課題です。さらに、高度な分析技術を駆使し、PFASをはじめとする新たな有機汚染物質の環境実態解明や、アジア地域を見据えた広域的なモニタリングにも注力しています。過去の公害の歴史や環境汚染事案の教訓を決して風化させることなく、現代の「目に見えない新たなリスク」に対して、新センターという新たな武器を持って迅速かつ的確に対処することこそが、私たちに課された不変の使命であると確信しています。

しかしながら、組織が大きな転換期を迎え、どれほど設備が高度化しようとも、それを支えているのは決して建物や機器ではなく、中で働く「人」に他なりません。現在、多くの自治体の研究所が直面している技術継承の課題や、限られた予算・人員のなかでの効果的な組織マネジメントは、当所にとっても例外なく重要な経営課題です。突発的な化学物質流出事故や未知のリスクが発生したときに、最後に頼りになるのは現場の研究員が持つ「確かな眼（分析技術）」と、真相を究明しようとする情熱です。新センターへの移転を見据え、若い研究員たちが自らの専門性を磨き、高いモチベーションを持って未来の課題に挑戦できるような環境づくりに、組織を挙げて取り組んでいるところです。

私たち地方環境研究所が地域に密着し、現場の最前線で積み上げられたデータは、時に国の政策を動かし、ひいてはアジアを見据えたワンヘルスの実践に向けた確かな足元を支える基盤となります。全国環境研協議会という、全国の地環研が結ぶ強固な横のつながりは、私たちにとって何にも代えがたい貴重な財産です。それぞれの地域が抱える課題は異なれど、住民の安心・安全な未来を守るという志は一つです。皆様と共に知見を共有し、互いに切磋琢磨しながら、次の世代へ美しい環境と確かな技術、そしてワンヘルスの未来を繋いでいくために、当所もその一翼を担っていく決意です。

